

村上忠順翁顕彰会報



京都詩仙堂丈山寺 第2の門 老梅関より 嘯月樓を臨む

★ 目 次 ★

- ・会長の言葉 P. 2
- ・女性部研修会に参加して P. 3
- ・村上忠順先生顕彰の旅 P. 4
- ・村上忠順と歌合 P. 5-6
- ・令和元年度活動報告 P. 6-7
- ・第14回「忠順大賞」入賞作品 P. 7-8

村上忠順翁顕彰会報 第31号

編集 村上忠順翁顕彰会事務局

発行 令和2年3月31日

令和元年に思う事



村上忠順翁顕彰会
会長 近藤 光良

元号が令和に代わりました。今更言うまでもなく令和の語源は日本の代表的歌集の万葉集から引用されました。令和の言葉を使ったのは山上憶良が大伴旅人だといわれています。「時に、初春の令月にして、気淑（よ）く風和らぎ、梅は鏡前の粉を披（ひら）き、蘭は珮（はい）後の香を薫す」から引用されたと聞きました。その意味は「美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味のようです。とかくITだととかAIとかいわれる時代にあつて、ゆつくり人々の心の綾や自然を味わう心の余裕を持つことの大切さを呼びかける元号のように思えます。私たちの活動もこの元号に倣って育っていききたいものだと思えます。

さて、令和元年になり、日本ではラグビーの世界大会が開催され、国内はともかく多

くの外国人客が日本を訪れました。そんな華々しいニュースの一方で、元年は多くの災害に見舞われた年でもありました。岐阜県で発生した豚コレラも、あつという間に豊田市や近隣の地域に広がり養豚農家に多大な被害を発生させました。

夏には猛暑、更には台風による豪雨のため大変な被害が発生し多くの皆さんが被害にあわれました。また、暖冬が続き野菜やスキーなどの観光客に影響を与えました。そして、一番深刻なのは、中国で発生した新型コロナウイルスの感染拡大と世界経済への影響です。この文章を書いている時点でも依然として衰える雰囲気はありません。地球が悲鳴を上げているようにも思えるとともに、時代の大きな転換点を感じます。

時代の転換点といえば、私たちが学んでいる村上忠順も大きな時代の転換点を生きた人物です。刈谷藩という幕藩体制の中にありながら、国学を通して尊王攘夷運動に関わり、新政府軍の大総督であった有栖川宮熾仁（たるひと）親王を補佐しました。明治時代になり有栖川宮から東京で活動しないかと勧められたにも拘らず、それを固辞し堤村の町医者、歌人として地域に尽くし

た村上忠順翁の生き方に学ぶべき事が多いと感じます。

現在、豊田市では旧東高校の跡地に歴史博物館の建設を計画しています。豊田市の大型公共施設としては最後の施設になるのかもしれませんが。合併により豊田市は愛知県内で最大の市域を持つ都市となりました。広大な地域の持つ歴史を後世の人たちに伝えるとともに、新たな時代を創る拠点となる施設です。

隣接の刈谷市も歴史博物館を建設し、村上忠順翁が活動した刈谷藩の歴史が展示され、検証される施設となっています。豊田市の博物館の中でも村上忠順翁の残した多くの文化的資料が展示されることになると思われまます。私どもの活動もこうした動きの一助となり、前林地区が改めて注目される時が来ることを願う次第です。



女性部会研修会に参加して

前田 幸子

令和元年度の女性部研修会は、命をつなぐ「塩付街道」への旅と題して七月三日に行われた。

当日は高岡農村環境改善センター前に集合し、西岡町やオアシス辺り、刈谷市泉田地域で塩付街道の車窓見学と説明があった。



学芸員による塩田作業説明

バスは塩付街道を走り、「吉良饗庭塩（きらあいはばじお）の里」に到着。昔ながらの塩づくりの説明を聞くことにより塩づくりは手間がかかり、重労働であることが想像できた。「西尾市吉良歴史民



塩焼き体験

俗資料館」では、塩焼き体験や施設見学をした。塩焼き体験では、良い塩ができるように一生懸命取り組んだ。今回の研修会では、人や動物が生活する上で欠かせない塩の製法や大切な塩が運ばれる「塩の道」について学ぶことができた。

「ふくなが亭」で美味しい昼食をいただいた後は、ボランティアガイドの説明を聞きながら、江戸時代の豪農、豪商である「旧糟谷邸」を見学した。愛知県指定文化財であるだけに広大なお屋敷は、風格のある建物と庭があり見応えがあった。

隣の「尾崎士郎記念館」は『人生劇



尾崎士郎記念館

場」で有名な尾崎士郎を偲んで開館された。尾崎士郎に関する多くの資料や書籍が展示され、東京から移築された書齋も見ることができた。

最後は、吉良家の菩提寺である華蔵寺を訪れた。苔むした吉良家の墓所を眺めながら、ボランティアガイドの説明を聞き、歴史を振り返る機会になった。

御影堂には吉良義央公の木像が、義康像、義定像と並んで祀られていた。そのお姿は穏やか、上品、知的であった。

バスは吉良町指定史跡である黄金堤を眺めながら豊田市に向かい、トヨタ会館に立ち寄って、帰路についた。事務局の方々の入念な準備のおかげで大変有意義な一日を過ごすことができた。感謝！



吉良上野介義央の墓

村上忠順先生顕彰の旅 Ⅱ京都Ⅱ

令和元年十月一日 中野 浩

この度の忠順先生ゆかりの人は江戸後期（一七九一年）京都に生まれ明治初期（一八七五）八十五歳で亡くなられた美しく聡明な尼僧蓮月さんであった。いつもの様に近藤銈司先生の素晴らしい解説で蓮月尼の人柄と行いに魅せられたのでその一部を引用させていただき責を果たしたいと思いません。



京都市 神光院山門前

蓮月さんは祇園に生まれ知恩院の寺侍大田垣光古の養女となり、大田垣誠（のぶ）と名のる。二度結婚したが二人の夫と子供とも死別し、三十四歳で出家し蓮月と名乗った。

陶器を造ったり、自詠の歌を書いて生活の糧を得ていた。六十六歳の頃は富岡鉄斎と共に製陶し蓮月焼きを流行らせた。

又、貧しい人々を救ったり橋を架けたりと社会にも目を向け行動する心優しい人でもあった。物事の白黒をはっきり言うところが通じ合ったのか忠順先生は蓮月さんより二十歳も年下であったがお二人の親交は深く今日、村上家には蓮月さんからの手紙が二十六通も残されている。当時の郵便事情では京から堤まで一年もかかる事もあったと知るとお二人の親交の深さと気の遠くなる様な時間の流れと辛抱強さにロマンスさえも感じる。

蓮月さんは年に十三回も生涯に三十四回も引越し「屋越しの蓮月」と呼ばれていた。絶世の美貌の故に言いよる男どもから逃れるためとか、年増に見える様に歯を全部抜いたりしてしまつたとの話もある。

又幕末の志士西郷さんに「うつ人もうた

れる人も心せよ、同じ御国の民にあらずや」との歌を送り戒めたとも言われる。言論的な危険性から逃れるためだったかも知れない。

この様な話から蓮月尼はしっかり自分の意見を持った自立した美しい魅力的な女性だったと想像する。



神光院境内 蓮月庵(茶室)

晩年七十四歳で神光院の和尚と親交をむすび翌年神光院の茶所に移り住んだ。三畳の清楚な佇まいには秋にしては暑い真昼の日ざしが射し込んでいた。

蓮月庵

白き畳や 秋あつし

ひろし

村上忠順と歌合

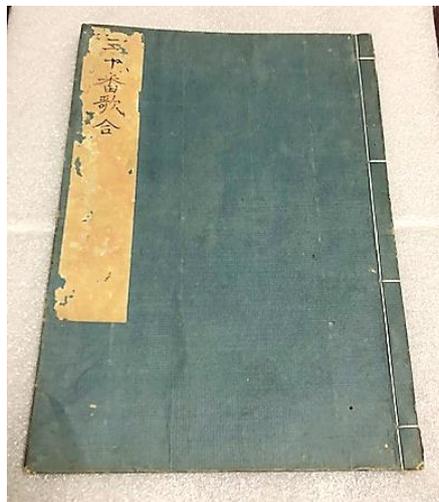
中澤伸弘

「歌合」とは左右に分かれた二人(方人)の歌各一首に、その優劣を著名な歌人につけてもらふことである。それを「判」と言ひ、その人を「判者」と言ふ。優れてゐる場合にはそちらに「勝」、どちらとも付けない引分けには「持」とつけ、それぞれがどのやうな点がよく、また悪いのかといった「判詞」を左に書くこととなつてゐる。古くは左右に歌を擁護する念人と言ふ役があつた。平安時代中頃から盛んとなつたが、歌論として古典的な価値をもつやうになつていつた。

歌を学ぶには歌の優劣をつけるといった視点が重要で、判者には善し悪しを見分ける力、作者にはそれを理解する力量が求められる。そのやうなことから徳川時代中期以降に作歌が盛んになるにつれて、この「歌合」も復権し、多くの歌壇で行はれたのであつた。歌会の場で半紙に歌を書いたものを左右に番へて、師の判を乞ふ場合もあれば、書物の形として半丁(一頁)の右側に左右の歌を書き、後に師に判を依頼してその左側に書いてもらつたりした。一番の左方には秀歌を置き、必ず「勝」にする慣はしもできた。歌会であれ、書物であれ

その時に作者の名は書かず、優劣がついたあとに明かす形をとり、これにより判者も自由に論評が出来、また遊戯性も持った座の文藝でもあつた。少なくとも八組(八番)、多ければ百番や二百番もあり、その数によつて「八番歌合」、「百番歌合」などと称した。

みよし市立歴史民俗資料館の塚本弥寿人氏の調査によれば三河においては、現在四十種の「歌合」と題する書物が残されてゐると言ふ。忠順翁の蓬蘆社中においても盛んに行はれたやうで、それに関する「歌合」は刈谷中央図書館の村上文庫や村上家、ほ



『三十番歌合』
(中澤伸弘氏所蔵)

かいくつかの場所に散在してゐる。

実は私の手許にも忠順翁が蓬蘆社中歌を番へて書いた歌合に、紀州の熊代繁里が判を書いたものが二冊ある。一つは『百番歌

合』(万延元年十二月)でいま一つは『三十番歌合』(慶應元年八月二十四日)である。後者には「松塙亭文庫」の印があるので、忠順の女婿の深見篤慶の旧蔵であることがわかる。私はこれを東京の古書肆から求めたのであつて、どのやうな経緯で東京に辿り着いたのかは不明であるし、私が買ったのも偶然であり、何か深い因縁を感じる。

ここでは『三十番歌合』の内容について述べよう。本歌合には慶應元年八月二十四日の日付があるが、忠順の「日次記」のその日にはその記載がない。半丁(一頁)に左右の二首の歌と作者名、その左に熊代繁里の判詞がある。歌は忠順の筆の様で特徴ある字体でわかる。作者名はまた別筆なので後に加へたやうである。歌題は「池水解」五番 「牧春駒」十三番 「里卯花」二番 「夏月涼」六番 「適逢恋」四番の計三十番で、作者一覧として村上楞 釈瑞蓮 成瀬廣冬 石川純孝 石川千涛 児島基隆 近藤政和 久野豊見 釈浄信 深見弘治 釈光郷 村上忠浄 鈴木重愛 釈報阿 鈴木小鈴女 水田周女 深見登(年)之子 深見富女 鈴木重國 安藤貴参 深見友良 深見篤行 深見篤慶の二十三人の名が書かれてゐるが、実際にこの他に深見徳女 水

田孝女 積賢岳 加藤祥徑 女房(どの女性かは不明)の五人の歌があつて二十八人となる。村上楞は忠順のことで、翁の号である蓬蘆の「よもぎ」を四方樹とも四方木とも書いた。「楞」の字を解すると「四方木」となり、編者が自分の名を隠してゐるのである。ここに翁の歌が八首あるが、最も多いのは篤慶の十首である。次に廣冬六首、年之子と基隆が四首、政和三首、富女二首の順で、他は一人一首である。そのうち巻頭をはじめとする最初の四題の左は忠順が自分の歌を意識的に配したのであらう。

作者を翁の關係で纏めると、村上家は忠順とその子忠浄の二人、深見家は忠順の娘深見登之子とその夫篤慶、その子篤行、富女、徳女の五人。一族として深見友良、弘治の二人と深見家が多い。鈴木家は忠順の娘鈴木小鈴女とその夫重愛、その子重國の三人で、ここまででは忠順の關係者である。その他の人物を『玉藻集』『元治元年千首』『三河歌集』などから検索すると成瀬廣冬(三河土呂)、水田周女(三河重原水田柳庵妻)、水田孝女(同關係者か)、石川純孝(三河吉原)、石川千濤(岡崎)、児島基隆(尾張和合)、近藤政和(三河桑子)、久野豊見(三河三好)、安藤貴参(挙母)、

加藤祥徑(三河伊保)、積浄信(岡崎照雲寺)、積光郷(岡崎満性寺)、積報阿(岡崎大林寺)、積賢岳(三河富永清泰寺)となる。積瑞蓮、女房は不明である。いづれも忠順關係の三河と深見家の岡崎といった地縁關係からなる人物であることがわかる。また木綿問屋であつた篤慶との繋がりなども考へられよう。歌合や歌集に載る歌人の關係は地域的な大きな繋がりによつてゐたものと思はれるのである。

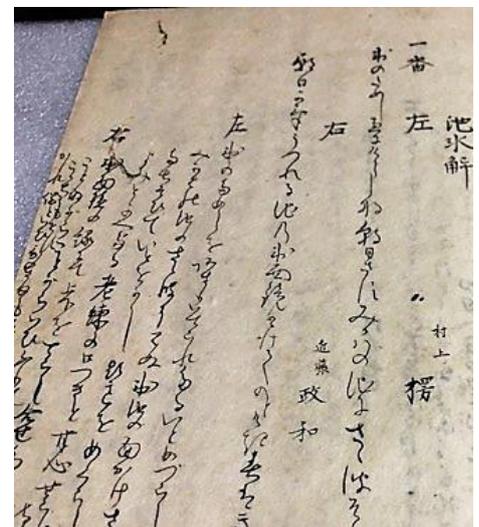
判詞を書いた熊代繁里は紀州の歌人国学者であり、本居内遠の門人であるので忠順とは同門であり、幾つか年下であつたが、天保十二年に相識の關係になつてから、安政三年に入門して以来、明治九年の繁里の死までその交流は続いた。村上家に残る龐大な繁里からの書簡がその關係を物語つてゐる。

巻頭の忠順の「池水解」の歌は

氷のためし過ぎにけらしな朝日さす

みかはの池にさざ波ぞたつ

であり、これに対し繁里は「題意をめぐらしてよみとゞのへたる老練の口つき甘心せられ侍り……左を勝と定めぬ」との判を書いてゐる。以下このやうな批評が続いてゐる。



「池水解」の歌

(中澤伸弘氏所蔵)

ここにある歌と忠順が編んだ『類題玉藻集』二編と『類題嗟峨野集』との關係を見ると、前者にはここから歌は採られてゐないが、後者には「牧春駒」の積光郷の歌 **霞たつみつのみまきにいさむなり**

時しりかほのひばり毛のこま

の一首が採られてゐる。繁里は「時しりかほのひばり毛 めづらしく調も高く聞こゆ云々」と判を書いてゐる。忠順はそれによりこれを秀歌として『類題嗟峨野集』に入れたのではなからうか。『類題嗟峨野集』の編纂は忠順が京都警備として慶應三年に上京した折と言ふので、この歌合と時期的にも合ふこととなるのである。忠順がこのやうな歌合を作つた意図を探ると様々なことが思ひ浮かぶのである。

令和元年度活動報告

○ 五月十九日

定例総会 参加者百九名

★「忠順大賞」表彰式 対象者二十名

★記念講演 「忠順大賞を審査して」
講師 久米翠雲先生

○ 七月二日

女性部研修会 参加者三十九名

「命をつなぐ 塩付街道の旅」

★西尾市吉良歴史民俗資料館見学

「吉良饗庭塩の里」塩焼き体験

★「ふくなが亭」で昼食

★「尾崎士郎記念館」「旧粕谷邸」見学

★吉良上野介菩提寺「華藏寺」見学

★トヨタ会館見学

○ 十月一日

歴史探訪 参加者四十三名

「忠順と屋越しの蓮月」

★京都市 神光院参拝・散策、蓮月庵見学

★和食「しょうざん」にて昼食

★詩仙堂丈山寺

○ 八月二日・九月六日

四方樹大学

参加者延べ七十三名

★講師 名古屋大学大学院教授

塩村 耕先生

★講義内容

忠順翁の「座右記」



四方樹大学受講風景



村上忠順翁顕彰会役員会

○ 十一月二十三日

村上忠順翁顕彰会役員会

★忠順翁命日墓参後、役員会。

○ 小学生の部

豊田市長賞 堤小 六年二組 早川 由姫

帰省してみんなで食べる手巻きずし

しあわせ巻いてみんなで笑顔

※年末に帰省して、餅つきをしたり、正月にはお雑煮をみなで食べた。手巻きずしを巻いた。特別の美味しさ。「幸せ巻いた」がいい。

豊田市議会議長賞

駒場小二年一組 中村 美咲

冬休みおとうとのせわやってみる

ママのたいへんわかる気がする

※冬休みのある日、弟を見ていたらお母さんがおむつかえてやってと言った。お母さんのまねをしてやった。ふろもてつだった。大変だった。

豊田市教育委員会賞

堤小 六年一組 石川 凜

友達と過ごした日々は宝物

もう少しだけいっしょにいたいな

※六年間一緒だった友達たち。遊びや勉強すべてが宝物。もう少し一緒にいたい。分かる！中学では学級は違うかも知れないが、いい友達ですね。

第十四回「忠順大賞」入賞作品

応募総数 一五八六首

選評 久米翠雲先

中日新聞社賞

駒場小一年二組 神谷 美果

さむいけどすみがパチパチあたたかい

きょうはかぞくでしちりんもち

※年末で皆でついたお餅。日頃使わない、しちりん、つきたてのお餅を焼いて食べた。炭のはじける音。火の色。あたたかい。おしかった。

会長賞 金賞 堤小 四年三組 柘植 ここみ

おじさんが高いてつぼうさかあがり

みんなびつくり年をうたがう

※公園で鉄棒していたら、よそのおじさんが高い鉄棒で逆上がりを見せてくれた。すごい！若い人じゃないのに。拍手かっさいだね。

○ 中学生・一般の部

豊田市長賞 秋葉町 岩田 美穂

独り身を望みし昔忘れたり

天の夫に帰れと涙

※時には、独りの方がどれほど気楽かしれないと思ったりしたことある。夫が病で突然亡くなって、はっと思う。すぐ還って、

と切ない想いが溢れる。

豊田市議会議長賞

前林中 三年六組 森島 万琳

私のが目線は高くなったけど

変わらぬ母の大きな背中

※愛情に育まれやすく育った。今私の目線は母を見下ろすほどに背丈は伸びた。しかし、母が小さいとは思えない。やはり、母の背は高く、広い。

豊田市教育委員会賞

青木町 奥村 良枝

坂道に轆かれし栗の実にほう

いのちいくつか拾いて帰る

※栗の木のある坂道。実が熟して道に転がり出た栗の実。車に轆かれ、匂いが周辺に満ちている。(轆かれない)実を拾う。「いのちひろう」がいい。

中日新聞社賞

前林中 一年五組 福田 実桜

心臓音ハッキリ聞こえるその瞬間

最優秀賞みんなの努力

※合唱コンクールの成績発表の静寂と緊張の

瞬間を詠んだ。心臓の鼓動が高鳴る。やつと、みんなの努力が実った。喜びの歓声があがる。嬉しいね。

会長賞 金賞 前林中 三年四組 堀越 未月

寒い中ゆげがきわだつ食卓に

幸せ色をみんなで囲む

※吐く息も白くなる冬。鍋物を囲む一家の温もりが強く感じられる風景である。第二句から食べ頃の鍋の様子が伝わる。「幸せ色を……」の言葉に詩情がある。

十入賞作品の一部を掲載しました、作品全体は別紙をご覧ください。

あとがき

今年の歴史探訪、目的地は京都市。小生には久しぶりの京都と初めての開通間もない新名神高速道路に胸が躍りいざ出発。従来の東名・名神より速く目的地に到着した実感に、調べてみれば片道で三十分以上の時間節約。おかげで『神光院』、和食「しょうざん」、「詩仙堂丈山寺」と、京都観光をゆつたりと満喫できました。

今回の観光バス利用は、会費が通常の倍額。にも拘わらず四十人超の参加に厚く感謝申し上げます。
(事務局 寺田)